

大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

Outcome report

計画名 Plan	近代中国の産業組織におけるドイツ技術者に関する史料収集・分析
氏名 Name	孟 奇
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	文学研究科・歴史文化学専攻・博士後期課程三年生
渡航国 Country	ドイツ
渡航日程 Travel schedule	2025年3月4日 ～ 2025年7月21日

- ・ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- ・写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- ・各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- ・日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

近代中国における代表的な鉱業企業の一つである萍郷炭鉱を事例とし、同炭鉱で活動した外国技術者（主にドイツ人）と工業知識の移転に関する諸問題を検討することを目的として、ドイツで史料調査を行った。調査は以下の五段階で実施した。

2025年3月6日～4月4日

ハイデルベルク大学の交換留学生向け冬期集中ドイツ語コースに参加し、短期間で集中的な言語訓練を受けた。この過程を通じて、ドイツ語運用能力を大幅に向上させ、今後の史料調査に必要な言語基盤を効果的に整えることができた。

同期間中には、ドイツ連邦公文書館（Deutsches Bundesarchiv）およびプロイセン枢密公文書館（Geheimes Staatsarchiv Preußischer Kulturbesitz）と連絡を取り、2024年5月の史料閲覧予約を確定した（当初4月を希望したが、予約システムの対応遅延により5月のみ確保可能であった）。

2025年4月7日～4月30日

ハイデルベルク大学漢学部が所蔵するデータベースを検索し、19～20世紀に中国で活動したドイツ人技師に関連する資料を調査した。その結果、ドイツ語および英語による複数の新聞報道を入手し、特に萍郷炭鉱の主任技師 Gustav Leinung の基本的な経歴などの重要な情報を得ることができた。

また、4月24日にはハイデルベルク大学において、経済史教授 Harald Fuess 氏が主宰する研究会で「Building ‘Coketown’ in China: A Case Study of a Chinese Coal Mine and Its Potential for Comparative Research」と題する学術報告を行った。本報告では、滞在中に予定している史料調査の概要を紹介し、Fuess 教授および研究グループの諸氏から、ドイツ各地の公文書館との連絡方法、資料調査の着眼点、史料解釈の方法など、多方面にわたる有益な助言を得た。

2025年5月5日～5月30日

続いて、ハイデルベルクからベルリンへ移動し、ドイツ連邦公文書館およびプロイセン枢密公文書館

で関連史料の閲覧と複写を行った。ドイツ人技術者たちがドイツ国内での生活史、職業経歴、来華前後の社会的・経済的背景を中心に調査を進めた。

日程は、5月5日～21日をドイツ連邦公文書館で、5月23日および5月26日～30日をプロイセン枢密公文書館での調査期間とした。

2025年6月2日～7月7日

ベルリンでの調査を終えた後、ハイデルベルクに戻り、ベルリンの二つの公文書館で収集した史料の読解と分析を行った。収集史料の一部はドイツ語による手書き文書であり、単独で正確に判読することが困難であったため、この期間中、ハイデルベルク大学漢学部の博士課程学生とともに週1～2回の小規模な研究会を開催し、協力を得て複数史料の解読作業を進めた。

2025年7月11日～7月18日

さらに、ハイデルベルクを出発し、デュイスブルク、エッセン、ボーフムなどの都市から成るドイツの代表的工業地域であるルール地方に赴き、現地調査を実施した。ルール地方はドイツ人技術者たちが来華以前に主として勤務していた地域であり、また彼らが所属していたクルップ社は19世紀末から20世紀初頭にかけて多数の技術者を中国に派遣していた。

調査期間中、エッセンに所在するルール博物館を訪れ、地域の産業発展史を把握するとともに、クルップ歴史文書館（Historisches Archiv Krupp）において同社の歴史的資料を閲覧した。これらの調査は、当時のドイツ工業発展、中国とドイツの関係、そして技術者たちの職業環境と生活状況を理解するうえで極めて有益なものとなった。

成果 Outcome

ドイツ各地の公文書館において、本研究テーマに直接関連する史料11部、総計1,000ページ以上の資料を収集した。これらの史料により、当時萍郷炭鉱で活動したドイツ人技術者について、来華に至る背景、中国での勤務・生活の実態、工場や炭鉱で担った主要な役割、中国人経営層・労働者・地域住民とのコミュニケーションの様子、さらに彼らが直面した主な困難とその対応過程を詳細に把握できた。加えて、当時のドイツ帝国駐漢口領事館による電報記録8部（総計400ページ以上）も収集しており、現在解読作業を進めている。これらの資料は、ドイツ人技術者がどのように本国と連絡を取り合っていたのか、また彼らとドイツ政府との関係を理解するうえで重要な手掛かりとなる可能性がある。

今後の展望 Prospects for the future

以上の調査成果を踏まえ、今後は独文と中文史料を統合的に分析し、ドイツ人技術者が近代中国における工業知識導入の過程で果たした役割を再検討するとともに、同時期の工業知識受容の特質を体系的に整理する予定である。その成果として「外国技術者と近代中国の技術移転——清末における萍郷炭鉱を事例として」と題する論文を執筆し、2025年12月に史学研究会の学術誌『史林』への投稿を目指す。

さらに、近代中国における工業知識受容の過程を、ドイツや日本での工業知識伝播の事例と比較検討し、中国事例の普遍性および独自性を明確化する。その研究成果は、日本国内および国際的な学術会議で発表し、多様な専門分野の研究者からの意見を取り入れる予定である。そして、2026 年度には、これらの研究成果を基盤として博士論文を完成させ、文学研究科博士後期課程を修了する計画である。